

## 初期日本天台における被接の解釈をめぐる

― 円珍『法華論記』と『授決集』を中心に ―

萩野翔太

### 【要旨】

天台三大部などに説かれる「被接」は、日本天台の論義や口伝法門において重要な教理の一つとして扱われているが、いわゆる初期日本天台における解釈や受容については資料不足の点からあまり検討がなされてこなかった。そこで本稿では、円珍の『法華論記』と『授決集』に説かれる被接に焦点を当て、日本天台における良源『被接義私記』以前の解釈の一端を明らかにした。

まず、基軸となる天台三大部や湛然の注釈書における被接の説を整理した。次に、円珍以前の日本天台における被接とそれに関する教説の受容を検討した。その上で、円珍『法華論記』と『授決集』における被接の解釈を考察した。その過程で、円珍は四教を仏意に基づくと理解した上で被接などの説を解釈をしていたことが明らかとなった。そして、『法華論記』と『授決集』などにみられる被接と別接通による解釈は、四教を前提にしながら、『摩訶止観』やそれを補足する湛然の注釈書で示される被接の説を踏襲したうえで解釈されていることを指摘した。

### 【キーワード】

被接・別接通・円珍・『法華論記』・『授決集』

はじめに

日本天台の教学は、天台三大部や湛然（七一―七八二）による三大部の注釈書をはじめとする中国天台の教学が基盤となっている。しかし、論義や口伝法門においては、天台三大部やその注釈書などにに基づきながらも、中国天台とは異なる立場から種々の説が立てられている。中でも、「被接」は重要な教理の一つとして論義や口伝法門において位置づけられており、日本天台において詳細に研鑽されていたことをうかがうことができる<sup>1)</sup>。

中国や日本の諸学派、諸宗の大師によって成仏をはじめ行位や断惑の問題は種々論じられている。そのような中で、中国天台において蔵通別円の四教と行位、断惑等との関係から被接の説が立てられ、それを踏まえた日本天台においては独自の展開を遂げることになる<sup>2)</sup>。

日本天台における被接は、智顛（五三八―五九七）説灌頂（五六―六三二）記の『法華玄義』と『摩訶止観』、湛然の注釈書の説が基軸となり展開する。特に、『法華玄義』と『摩訶止観』に示される被接の記述の相違や、湛然の注釈に対する解釈をめぐる、論義や口伝法門に関する文献を中心に多様に論じられることになる。このことは、大久保「一九九八B」においても既に指摘されており、被接に関する定義や行位など種々の義が論じられていたことが言及されている<sup>3)</sup>。その中で、特に良源（九二―一九八五）の撰述と伝えられている『被接義私記』<sup>4)</sup>が、「御廟」「御廟大師」「大僧正」などの名で、証真（一一三―一頃一二二〇頃）の『法華玄義私記』と『止観私記』をはじめ、良源以降の日本天台の諸文献における被接を扱う箇所が高い頻度で用いられており、後代の日本天台の学匠に影響を与えたことの指摘がなされている<sup>5)</sup>。確かに、被接が説かれている日本天台の論義や口伝法門の文献には、随所に良源『被接義私記』の引用やその解釈を踏まえている箇所が

確認できる。また、良源『被接義私記』には「然闡梨」の私記をはじめ先学の説を引用する箇所があることも指摘されており、良源『被接義私記』は先行する日本天台の説を踏まえたうえで撰述されたことが推察できる。このように、日本天台において被接は、良源『被接義私記』とその影響がある証真の三大部私記、鎌倉以降に撰述された論義や口伝法門に関する文献を通して詳細に論じられ、多様な解釈が展開していくことになる。

しかしながら、良源『被接義私記』が撰述される以前、より具体的には論義や口伝法門で体系化される以前の解釈や受容については資料不足の点から未だ明らかでない点が多い。そのような中、良源『被接義私記』以前の被接を検討する上で重要な文献が円珍（八一四―八九一）の『法華論記』と『授決集』である。とくに、『授決集』には「別接通決第三十九」という被接を中心に扱った決があり、良源『被接義私記』以前の解釈と受容を知る上で、円珍の著作は欠かすことのできないのである。なお、池田「一九七八」によって、

「世人未知四教義」（二〇七下）と嘆ずるように、円珍は天台教判の優位を確認し、それを湛然教学を介して認めたのであるが、それも例えば、「妙楽之判以別接通、他人絶無此接義」（授決集二四下）というような、「被接義」（三九上・四〇下）の自在な応用面<sup>10</sup>で認めていることは、湛然門下の教判理解が形式化していった歴史的事実と対照して極めて印象的なのである。

と、被接を例にあげながら、円珍の天台教判の理解が形式的なものではなかったという指摘がなされている。『法華論記』に関しては頁数を示すのみであるが、『授決集』については「華嚴円教兼歴別決第十二」

の「妙楽之判以別接通、他人絶無此接義」という文を引き、被接が応用的に用いられていることに言及している。では、仮に円珍が被接を応用的に用いているとするのであれば、それは具体的にどのような背景があつてなされているのか。また、『法華論記』は円珍が在唐中（八五三―八五八）に撰述をはじめ、最終的な修治は帰朝後であつたと考えられているが、一方の『授決集』は元慶八年（八八四）に弟子の良勇（八五四―九二三）のためにまとめられたものとみなされているので、成立の時期が大幅に異なる。このため、『授決集』の記述をもつて『法華論記』における傾向も合わせて論じることについては検討の余地がある。また、被接を中心に取り扱う『授決集』の「別接通決第三十九」に説かれる別接通についても検討する必要がある。

そこで、本稿では、まず論の中心となる被接の説を整理する。次に、円珍以前の日本天台における被接とそれに関連する教説の解釈と受容を検討する。そして、円珍『法華論記』と『授決集』「華嚴円教兼歴別決第十二」・「別接通決第三十九」をそれぞれ検討し、円珍の著述の中で被接がどのように解釈され、用いられていたのかを考察する。それによって、日本天台における良源『被接義私記』以前の被接に対する解釈の一端を明らかにしたい。

### 一 天台教学における被接について

天台教学では、教えの内容を蔵通別円の四教で分類しており、四教それぞれに証果や諦、行位、断惑などが立てられている。ただし、四教それぞれに証果が立てられていても、蔵通別の三教の証果はあくまで教えとして存在しているだけで、そこに至る行者はいないといわれている。そのことは、「三教果頭有教無人」などと称されている<sup>10</sup>。すなわち、証果に関しては、最終的に円教に至らなければ得ることができない

め、蔵通別の三教から円教に至るための説が立てられたといつてよい。本稿で取り扱う被接もその一つであり、蔵通別円の四教を前提にしている説である。

被接の成立は、地論学派をはじめとする天台に先行する学派からの影響が考えられ<sup>11</sup>、智顛の段階では簡略であった可能性が指摘されている<sup>12</sup>。智顛の撰述と伝えられている『四教義』の記述から成立初期の段階では通教の菩薩が別教に至る別接通のみが立てられていた可能性があり、灌頂によって筆録された『法華玄義』の記述から通教の菩薩が円教に至る円接通と別教の菩薩が円教に至る円接別が後に立てられるようになったと考えられている<sup>13</sup>。

被接に関する記述は智顛や灌頂の著作に散見されるが、まとまった記述は智顛説灌頂記の『法華玄義』と『摩訶止観』に確認できる。『法華玄義』では別接通・円接通・円接別の三被接が説かれる一方で、『摩訶止観』には別接通しか説かれていないことは、先行研究で指摘されている通りである<sup>14</sup>。

『法華玄義』では境妙の二諦と三諦を説く箇所を中心に三被接が示されている。二諦の箇所では、蔵通別円の四教と別接通・円接通・円接別からなる七種の二諦が<sup>15</sup>、三諦の箇所では中道第一義諦を明らかにしない蔵教と通教を除いて、五種の三諦が説かれる<sup>16</sup>。このうち、七種二諦を略説する箇所とそれに続く問答において、

七種二諦広説如<sub>レ</sub>前。略説者、界内相即不相即、界外相即不相即四種二諦也。別接通五也。円接通六也。円接別七也。問。何不<sub>レ</sub>接三三蔵。答三蔵是界内不相即。小乘取<sub>レ</sub>証根敗之士故不<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>接。余六是摩訶行門。若欲<sub>レ</sub>前進<sub>レ</sub>亦可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>去。是故被接。問若不<sub>レ</sub>接亦不<sub>レ</sub>會。答接義非<sub>レ</sub>會義。未<sub>レ</sub>會之前不<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>被接<sub>レ</sub>。<sup>17</sup>

と、蔵教では被接がなされることが明白に示される。すなわち、『法華玄義』では、被接がなされるのは大乘であり、小乗である蔵教には開會（會義）がなされなければ、被接を論じることはないと説かれており、機根の上での違いが示されているのである<sup>18</sup>。

一方、『摩訶止観』においては別接通しか説かれていないが、『法華玄義』と異なり、被接がなされる構造が細かく示されている。例えば、『摩訶止観』卷三下の「偏円」<sup>19</sup>における権実を明かす箇所で、別接通だけが説かれる理由と行位および諦について、次のような問答によって示されている。すなわち、

問。為<sub>レ</sub>一実<sub>レ</sub>施<sub>レ</sub>三権<sub>レ</sub>。唯有<sub>レ</sub>四種止観<sub>レ</sub>。若以<sub>レ</sub>別接<sub>レ</sub>通止観者、為<sub>レ</sub>權為<sub>レ</sub>実。復何意不<sub>レ</sub>預<sub>レ</sub>四教<sub>レ</sub>。何意但言<sub>レ</sub>接<sub>レ</sub>通。何位被<sub>レ</sub>接。接<sub>レ</sub>入何位<sub>レ</sub>。<sup>20</sup>

と。まず、一実（円教）を説くために仮に三権（蔵通別）を説いており、そのため四種の止観が立てられていることが示される。そして、その場合は別教によって通教を接す止観は権実のどちらであるのか、なぜ接が四教全体に関わらないのか、なぜ通教だけを接すのか、接せられる位と接入していく位はどこか、という点から問難がなされる。これらに對して、

答。接得<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>教此則属<sub>レ</sub>權。接得<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>証此則属<sub>レ</sub>実也。四教論<sub>レ</sub>其始終<sub>レ</sub>接但終而無<sub>レ</sub>始。故不<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>四教<sub>レ</sub>。諸教皆接亦必<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之、此義不<sub>レ</sub>用者、二教明<sub>レ</sub>界内理<sub>レ</sub>、二教明<sub>レ</sub>界外理<sub>レ</sub>。兩処交際須<sub>レ</sub>安<sub>レ</sub>一接<sub>レ</sub>、故但以<sub>レ</sub>別接<sub>レ</sub>通。若齊<sub>レ</sub>通為<sub>レ</sub>言不<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>破<sub>レ</sub>無明<sub>レ</sub>、八地名<sub>レ</sub>支仏地<sub>レ</sub>、從<sub>レ</sub>此被<sub>レ</sub>接知<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>中道<sub>レ</sub>。九地伏<sub>レ</sub>無明<sub>レ</sub>、十地破<sub>レ</sub>

無明<sup>一</sup>。即名為<sup>レ</sup>仏。但一品破、那得<sup>二</sup>是極<sup>一</sup>。故知<sup>レ</sup>接<sup>二</sup>入別<sup>一</sup>也。  
 若望<sup>二</sup>別教<sup>一</sup>是入<sup>二</sup>初地位行<sup>一</sup>也。若就<sup>レ</sup>諦論<sup>レ</sup>接者、通教真諦空中合  
 論。從<sup>レ</sup>初已來但觀<sup>二</sup>真中之空<sup>一</sup>、破<sup>二</sup>見思惑<sup>一</sup>、尽到<sup>二</sup>第八地<sup>一</sup>、方為  
 說<sup>二</sup>真內之中<sup>一</sup>。故云<sup>二</sup>智者見<sup>レ</sup>空及与<sup>レ</sup>不空<sup>一</sup>。被<sup>レ</sup>接方聞、聞已見<sup>レ</sup>  
 理、即是入<sup>二</sup>別位<sup>一</sup>也。三藏菩薩明<sup>レ</sup>位不<sup>レ</sup>爾。故不<sup>レ</sup>論<sup>レ</sup>接。別円発  
 心已知<sup>二</sup>中道<sup>一</sup>更將<sup>二</sup>何接<sup>一</sup>。故知接但在<sup>レ</sup>通也。<sup>21</sup>

まず、権実に関しては、接して教に入ることができるのが権、証に入ることができるのが実、に属することが示される。次に、諸教における接の可能性は考慮されるべきであるが、別教だけが通教を接する理由を三界内と三界外の関係から示される。藏通の二教は三界内の理を、別円の二教は三界外の理を明かしており、三界内と三界外がまじわることを一つの接によって立てている。このため、別をもつて通を接する（別接通）ことだけを説くのであるとの解釈が示されている。まず、通教にかぎるのであれば無明を断じることが論じない。しかし第八地の支仏地に接せられて中道第一義諦があることを知る。そして、通教の第九地で無明を伏し、第十地で無明を断じることが、あくまで一品の無明を断じただけであり窮極的な仏果ではないので、別教に接入していく。接入していく位は、別教の初地になるとしている。次に、諦について論じた場合は、通教の真諦は空諦に中諦が合わせて示されるという。すなわち、最初の段階では、空諦を観じるだけであり、見思惑を断じて第八地に至り、そこではじめて真諦のなかに中諦が説かれる。接入されて初めてこのことを聞き、それによって理をみることであれば別教に至るのであると説いている。また、三蔵の菩薩は行位のありかたが異なるので被接を論じることとはなく、別教と円教は初発心の時から中道を知っているため、再度被接が説かれない。これらの点から通教だけに被接が説かれているとし

ている。

なお、行位に関しては『摩訶止観』卷六下において中観を修し中観によって証す別接通の位が示される。すなわち、「若別接通者、七地論<sup>レ</sup>修八地論<sup>レ</sup>証<sup>二</sup>」<sup>22</sup>と、第七地で修し、第八地で証すことが述べられている。

このように、『摩訶止観』では被接がなされるのは通教の第八地であり、真諦のなかに空諦だけでなく中諦があることをさすることで別教の初地に接せられていくという被接の構造が示される。そして、湛然の注釈では被接についていくつかの補足がなされる。まず、湛然『止観輔行伝弘決』卷三之四では、『摩訶止観』卷三下の諸教での接の可能性について、

諸教下答<sup>二</sup>第三問<sup>一</sup>。玄文具明<sup>二</sup>以<sup>レ</sup>円接<sup>レ</sup>通以<sup>レ</sup>円接<sup>レ</sup>別。彼約<sup>二</sup>教道<sup>一</sup>。於<sup>二</sup>教道中<sup>一</sup>或以<sup>二</sup>権教<sup>一</sup>接<sup>レ</sup>権、或以<sup>二</sup>実教<sup>一</sup>接<sup>レ</sup>権。今但約<sup>二</sup>教所詮理辺<sup>一</sup>。但以<sup>二</sup>権理<sup>一</sup>被<sup>二</sup>実理接<sup>一</sup>於<sup>レ</sup>義略足。是故但云<sup>二</sup>内外交際<sup>一</sup>須<sup>レ</sup>立<sup>二</sup>一接<sup>一</sup>。余如<sup>レ</sup>前弁。<sup>23</sup>

といい、『法華玄義』に説かれる円接通・円接別は教道の立場から示されていると解釈している。そして、『摩訶止観』では教えをあらわす言葉ではなく、義理内容を説く所詮の理による立場から別接通のみを説くとの解釈が示されている。

同じく、『止観輔行伝弘決』卷三之四の『摩訶止観』卷三下の「通教にかぎる」以降の文での注釈と「第九地で無明を伏する」以降の文の注釈が、次のようになされる。

若齊下答<sup>二</sup>第四問<sup>一</sup>。八地方接。此拠<sup>二</sup>下根<sup>一</sup>。九地下答<sup>二</sup>第五問<sup>一</sup>。從<sup>二</sup>下根<sup>一</sup>來多至<sup>二</sup>初地<sup>一</sup>。中上入者此即不定。又案位入則在<sup>二</sup>地

前<sup>1</sup>。勝進入者則至<sup>2</sup>初地<sup>1</sup>。言<sup>3</sup>九地伏<sup>4</sup>十地破<sup>1</sup>者、仍<sup>5</sup>本立<sup>6</sup>名名<sup>7</sup>二九十地<sup>1</sup>。入<sup>8</sup>別円教<sup>1</sup>、応<sup>9</sup>云<sup>10</sup>初地及以初住<sup>11</sup>。<sup>24</sup>

すなわち、第八地において被接がなされるのは下根の者であり、多くは別教の初地に至るのである。また、中根と上根の行者が至る別教の位は不定であり、案位（位をおさえとどめる）入であれば地前、勝進（勝れた方に進む）入であれば初地に至る。そして、行者が無明を第九地に伏し第十地で破すのは通教によつた場合であり、行者は別教と円教の初地と初住に入ることが示される。上中下の三根の具体的な行位は、『止観輔行伝弘決』卷六之四における『摩訶止観』卷六下の「第七地に修を論じ第八地に証を論じる」文と『摩訶止観』卷三下の「第八地に中道を聞き、第九地で無明を伏し、第十地で無明を破して仏となす」文との不同が問われる箇所を示されている。すなわち、

初明<sup>1</sup>通教以<sup>2</sup>別接<sup>1</sup>者、方乃得<sup>3</sup>云<sup>4</sup>七地論<sup>5</sup>修八地論<sup>6</sup>証。問。第  
三卷明<sup>7</sup>別接通<sup>8</sup>中、何故乃<sup>9</sup>云<sup>10</sup>八地聞<sup>11</sup>中道<sup>12</sup>、九地伏<sup>13</sup>無明<sup>14</sup>、十  
地破<sup>15</sup>無明<sup>16</sup>、方得<sup>17</sup>上<sup>18</sup>名<sup>19</sup>為<sup>20</sup>佛<sup>21</sup>。以<sup>22</sup>何義<sup>23</sup>故、与<sup>24</sup>此不同。答。始  
從<sup>25</sup>四地<sup>26</sup>終至<sup>27</sup>九地<sup>28</sup>咸受<sup>29</sup>接名<sup>30</sup>。三根不<sup>31</sup>同故位不<sup>32</sup>等。四地爲<sup>33</sup>  
上六七爲<sup>34</sup>中八九爲<sup>35</sup>下。文從<sup>36</sup>中說故云<sup>37</sup>七地<sup>38</sup>。前爲<sup>39</sup>銷<sup>40</sup>經故從<sup>41</sup>  
下說。故大品云、十地菩薩爲<sup>42</sup>如<sup>43</sup>佛<sup>44</sup>。經從<sup>45</sup>下者其位定故。故諸經  
論多從<sup>46</sup>下說。言<sup>47</sup>如<sup>48</sup>佛<sup>49</sup>者、通第十地名爲<sup>50</sup>佛地<sup>51</sup>。被接之人能破<sup>52</sup>  
無明<sup>53</sup>。無明破已、如<sup>54</sup>彼佛地<sup>55</sup>同得<sup>56</sup>八相<sup>57</sup>。故名爲<sup>58</sup>如<sup>59</sup>。<sup>25</sup>

とあるように、第四地から第九地までの間で被接がおけると説かれてい  
る。具体的には第四地と第五地を上根、第六地と第七地を中根、第八地  
と第九地を下根としている。<sup>26</sup>

また、『止観輔行伝弘決』卷三之三では、乾慧地や性地より別教や円  
教に至る行者は被接に相当しないと説かれている。すなわち、

若從<sup>1</sup>乾慧性地<sup>2</sup>來者、亦不<sup>3</sup>名<sup>4</sup>接。義同<sup>5</sup>三藏初後心<sup>6</sup>故。故四念  
処云<sup>7</sup>、通有<sup>8</sup>三種<sup>9</sup>。一者因果俱通、即通教是。二者因通而果非<sup>10</sup>  
通、即被接者是。三者通<sup>11</sup>別通<sup>12</sup>円、即是別円。用<sup>13</sup>於通教<sup>14</sup>而爲<sup>15</sup>三  
便<sup>16</sup>。但成<sup>17</sup>別円因果人<sup>18</sup>也。是故菩薩擲<sup>19</sup>位雖<sup>20</sup>同、乾慧性地觀慧猶  
劣。是故亦復不<sup>21</sup>受<sup>22</sup>接名<sup>23</sup>。<sup>27</sup>

といい、『四念処』卷二の文をもとに、因果の点から通教に関わる三  
種の行者のあり方が示されているのである。三種の行者とは、いわゆる  
因と果が全て通の通教の行者、因が通で果が通ではない被接をする行  
者、通教を方便として示し実際の因と果が別教または円教である行者を  
いう。<sup>29</sup>

なお、被接とは別に別教の菩薩については、『法華玄義』<sup>30</sup>や『摩訶  
止観』<sup>31</sup>などにおいて円教と証道が同じであると説かれる。特に、別教  
の初地は円教の初住にあたり、菩薩は円教の位を進んで行き、別教の第  
二地以降はただ教があるだけで、実際に位を登る者がいないとする説  
（有教無人）が立てられる。このため、別教の菩薩は被接が立てられな  
くとも、円教にいたることが可能となっている。

以上のように、被接に関しては『法華玄義』では二諦や三諦の関係を  
中心に別接通・円接通・円接別の三被接が立てられているのであるが、  
『摩訶止観』では諦や行位、因と果、界内と界外の関係などから別接通  
が示されている。これらを踏まえた上で、湛然によって『法華玄義』に  
説かれる円接通・円接別はあくまで教えの上でのみ示されたものである  
との解釈が示されるに至る。そして、『摩訶止観』で説かれる別接通こ

そ、所詮の理の立場から示されているという解釈がなされる。特に、被接がなされる通教の行位と別教に至った場合の行位が『摩訶止観』によって広く示される。これらの説を踏まえた上で、いわゆる初期日本天台において被接をはじめ円教に至る教説がどのように解釈されていたのかを章を改めて検討していく。

## 二 円珍以前の被接と関連する円教へ至る教説について

先述したように、天台教学では円教でなければ仏果を得ることができないため、円教に至る説が立てられている。特に、湛然『止観輔行伝弘決』卷三之四でも確認できたように、章疏ごとに異なる記述をいかに理解するのが問題となった。日本天台においても、最澄（七六六／七七七―八二二）問道遼（一七六六―一八〇五）決義（最澄が問道遼が義を決した）『天台宗未決』に「一有別教菩薩登二地已上廻入円教位乎」と「二通教第十地菩薩廻入円教何位」の二問があることから、別教や通教から円教に至る説の解釈に注意を払っていたことがうかがえる。このうち、第一問における最澄の問と道遼の答は次の通りである。

一。最澄問曰。別教菩薩三賢位究竟。入初地一時即廻入円教初住一。更不<sub>レ</sub>涉二地三地<sub>一</sub>入云云。今所<sub>レ</sub>疑、若有別教菩薩登二地乃至十地及等覺位<sub>一</sub>廻入円教位乎。座主答曰。大師教中有其二説一。一者教道説、二者証道説。別人初地即是初住、以証道同<sub>一</sub>故。更無二三等地<sub>一</sub>也。此約証道説也。教道説者、為有<sub>一</sub>分機縁<sub>一</sub>宜聞<sub>一</sub>淺深隔歷不融之法<sub>一</sub>。則説<sub>一</sub>十地深淺<sub>一</sub>。証位各異。下地不知<sub>一</sub>上地功德<sub>一</sub>。但有<sub>一</sub>教道<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>人<sub>一</sub>也。<sup>32</sup>

まず最澄の問では、別教菩薩が初地に至ると円教の初住に廻入して、

別教の第二地や第三地に至ることがないという説が示される。これについて、仮に行者が別教の第二地から第十地、等覺位に進んだ場合、円教の位に廻入する可能性はあるのか、という問いが立てられる。これに対する座主（道遼）の答では、教道と証道の立場があることが示される。

このうち、別教の初地が円教の初住であるというのは証道が同じであるからであり、別教の第二地以降に進む可能性はない、という説は証道の立場から論じていることが示される。初地以降の位は教道の立場から立てられているだけで、実際に行者はいない。最澄が問の箇所で最初に示す説と道遼の答は、先述した『摩訶止観』の別教と円教の証道を同じとする説<sup>33</sup>をもとにしていることが分かる。

同様に、第二の問答が次のようになされる。

二。最澄問曰。通教第十地者名<sub>一</sub>仏地<sub>一</sub>。若到<sub>一</sub>此地菩薩<sub>一</sub>。廻入円教何位<sub>一</sub>乎。座主答曰。此菩薩入有<sub>一</sub>二種<sub>一</sub>。一接<sub>一</sub>入円<sub>一</sub>。先既得<sub>一</sub>空。発<sub>一</sub>此心<sub>一</sub>時、若破<sub>一</sub>塵沙<sub>一</sub>、位在<sub>一</sub>十信<sub>一</sub>。若破<sub>一</sub>無明<sub>一</sub>、即入<sub>一</sub>初住<sub>一</sub>。雖<sub>一</sub>是円解<sub>一</sub>、麁垢先落。故如<sub>一</sub>此也。若至<sub>一</sub>法華<sub>一</sub>以<sub>一</sub>開顯<sub>一</sub>即并入<sub>一</sub>初住<sub>一</sub>。故云<sub>一</sub>汝等所<sub>一</sub>行是菩薩道<sub>一</sub>也。<sup>34</sup>

まず、通教の第十地は仏地と名づけられているが、仮に第十地に至った菩薩がいるのであれば、円教のいずれの位に廻入するのか、という問が最澄によってなされる。これに対する座主の答では、二種の立場から廻入する位が立てられている。一つは、円教に接入するにあたり、塵沙惑を断じたのであれば十信に、無明惑を断じているのであれば初住に接する。これは円教における理解であり、麁垢を先に落とすようなものであると説かれている。<sup>35</sup> もう一方は、『法華経』が説かれる時に至れば開顯によって初住に入ることが説かれている。<sup>36</sup>

基本的に、『摩訶止観』や『止観輔行伝弘決』の教説に則るのであれば、教はあっても実には行者がいない三教果頭有教無人の点から解決することも可能である。しかし、第二問答の答のように、通教より円教に至る解釈をすることも可能であった。

このように、円教に至る教説は早い時期から関心が払われていた。なお、被接に関するまとまった記述が確認できるのは、義真(七八一—八三三)『天台法華宗義集』である。被接に関する記述は、四教義と二諦義の箇所にある。四教義においては、簡略であるが通教を論じる箇所では次のように記されている。

問。若被<sup>37</sup>別円接<sup>37</sup>為<sup>37</sup>何位<sup>37</sup>耶。答。若証<sup>37</sup>中道<sup>37</sup>成<sup>37</sup>別教初地、円教初住<sup>37</sup>也。

通教において別教と円教の接を被ると、別教の初地と円教の初住に至ることが示されている。この箇所は、『摩訶止観』卷三下<sup>38</sup>をもとにしている記述であることがうかがわれる。しかし、被接がおこる位に関しては特に言及されていない。

一方、二諦義の箇所には『法華玄義』や『法華玄義釈籤』をもとにする箇所がある。二諦義では、『法華玄義』卷二下の七種二諦の文が引用された後、問答体で『法華玄義』と『法華玄義釈籤』の文をもとに次のようにまとめられている。

問。何故有<sup>39</sup>此七種二諦<sup>39</sup>耶。答。仏於<sup>39</sup>七機<sup>39</sup>曲開<sup>39</sup>七重<sup>39</sup>。問。其七重何耶。答。玄釈籤云、一藏、二通、三別接通、四円接通、五別、六円接別、七円。問。既是四教。何故成<sup>39</sup>七。答。使<sup>39</sup>仏本懷暢<sup>39</sup>使<sup>39</sup>物宿種<sup>39</sup>遂<sup>39</sup>。問。別接通、円接通、円接別意如何耶。答。若止観中為<sup>39</sup>

成<sup>39</sup>理観<sup>39</sup>。但以<sup>39</sup>界外理<sup>39</sup>接<sup>39</sup>界内理<sup>39</sup>。問。何故如<sup>39</sup>是。答。藏通兩教明<sup>39</sup>界内理<sup>39</sup>。別円二教明<sup>39</sup>界外理<sup>39</sup>。通別兩教即是兩理之交際。是故但明<sup>39</sup>別接通<sup>39</sup>耳。問。准<sup>39</sup>此義但一接<sup>39</sup>。何故玄義立<sup>39</sup>三接<sup>39</sup>耶。答。前六二諦仍存<sup>39</sup>教道<sup>39</sup>於<sup>39</sup>法華前<sup>39</sup>逗<sup>39</sup>彼權機<sup>39</sup>。故有<sup>39</sup>円接通別二義<sup>39</sup>。問。何不<sup>39</sup>接<sup>39</sup>三藏<sup>39</sup>。答。三藏是界内不<sup>39</sup>相即<sup>39</sup>。小乘取<sup>39</sup>証故不<sup>39</sup>論<sup>39</sup>接<sup>39</sup>。余六是摩訶衍。若欲<sup>39</sup>前進<sup>39</sup>亦可<sup>39</sup>得<sup>39</sup>去<sup>39</sup>。是故被接。問。若不<sup>39</sup>接<sup>39</sup>亦不<sup>39</sup>會<sup>39</sup>。答。接義非<sup>39</sup>會義<sup>39</sup>。故未<sup>39</sup>會<sup>39</sup>之前不<sup>39</sup>論<sup>39</sup>被撰<sup>39</sup>。問。七重二諦後五種者義已含<sup>39</sup>三。何故名<sup>39</sup>二諦<sup>39</sup>耶。答。雖<sup>39</sup>義含<sup>39</sup>三猶<sup>39</sup>二諦撰<sup>39</sup>也。問。義含<sup>39</sup>三者何等。答。幻有即俗。空即是真。本空是中。問。是中与<sup>39</sup>空撰<sup>39</sup>何諦<sup>39</sup>耶。答。若合在<sup>39</sup>俗諦<sup>39</sup>即如<sup>39</sup>別教一名含<sup>39</sup>真人<sup>39</sup>俗<sup>39</sup>二諦<sup>39</sup>。若合入<sup>39</sup>真諦<sup>39</sup>如<sup>39</sup>別円入<sup>39</sup>通名<sup>39</sup>中含入真<sup>39</sup>一諦<sup>39</sup>。円教即名<sup>39</sup>不思議真俗<sup>39</sup>。細得<sup>39</sup>此意<sup>39</sup>尋<sup>39</sup>名釈<sup>39</sup>義不<sup>39</sup>失<sup>39</sup>毫微<sup>39</sup>。

この箇所では、『法華玄義』の七種二諦に対する『法華玄義釈籤』による四教と三被接の配当と、『摩訶止観』で別接通のみが説かれ、『法華玄義』で別接通だけでなく円接通・円接別が説かれる理由、蔵教が被接をしない理由、七種二諦の後に五種三諦が説かれる理由等が示されている。いずれも、『法華玄義』と『法華玄義釈籤』の文に基づいており、新たな解釈は示されていない。

以上のように、被接に対する独自の解釈は確認できないが、『天台法華宗義集』が撰述された頃の日本天台では『法華玄義』と『摩訶止観』、湛然の注釈書を中心に、被接の説が理解されていたとみてよいであろう<sup>41</sup>。

### 三 円珍『法華論記』における被接

円珍『法華論記』は、智顛説灌頂記の『法華文句』や湛然『法華文句

記」、智度『法華經疏義續』などによる世親『法華論』の解釈をもとにしながら、『法華論』を注釈している。また、吉蔵(五四九―六一三)や基(六三三―一六八二)による『法華論』の解釈を批判する箇所や、天台教学に基づきながら円珍によって踏み込んだ解釈がなされている箇所がある。先述したように、池田「一九七八A」によって円珍の『法華論記』に被接の記述があることは既に指摘されている。天台教学をもとに解釈する以上、被接をはじめとした天台の教説が『法華論記』に確認できるのは不思議なことではない。では、『法華論記』に説かれる被接は、池田「一九七八A」によって指摘されるように自在な応用面を認めることができるのか。本節では、該当すると考えられる箇所を中心に『法華論記』における被接の記述を確認していく。

池田「一九七八A」によって指摘される被接が説かれる箇所は、おそらく『法華論記』巻一末の、第八地に無功用に入ることを四教に基づきながら解釈することを試みる箇所である。該当箇所は次の記述からはじめ。すなわち、

今積、第八地入無功用、義通融疑滯。世人未會四教。又迷接義。徒立二種菩薩。未會如來玄旨。言二種菩薩者、一智増上菩薩、二悲増上菩薩。智増菩薩從初歡喜地入無功用位。悲増菩薩至第八地入無功用。何以故智増菩薩自行為先早斷煩惱。故從初地得入無功用。悲増菩薩化他為先故留惑累。至不動地。方乃斷惑入無功用。故諸經論說初地証皆提智増說。八地入拋悲増上。已上人語。<sup>44</sup>

とある。円珍は第八地に無功用に入ることを解釈するにあたり、まず、世の人(天台宗以外の人)が四教を理解していないことを指摘してい

る。そして、「接義に迷う」とあるように、被接(接義)を用いておらず、いたずらに智増・悲増の二種菩薩をもって会通を試みている点を「如來の玄旨を会さず」と批判している。割注「已上人語」<sup>45</sup>として立てられる智増菩薩と悲増菩薩の説は、基の『成唯識論述記』などに説かれる。智増菩薩は、自らの行を先におこない、速やかに煩惱を断じて初歡喜地で無功用に入る。一方、悲増菩薩は利他を優先し、煩惱を留めて第八地の不動地で無功用に入る。このように、諸經論に説かれる初地と第八地で無功用に入るのは、それぞれ智増菩薩と悲増菩薩であることが示されているのである。

そして、「已上人語」の後の「今謂」の箇所では、このような智増菩薩と悲増菩薩の説に対して、

今謂、此積雖似通經大以迷教。竜樹天親悉迷佛意。後人無識濫積謬會。故今示正。夫仏説教綵有四階。謂藏通別円。即四乘教也。人暗斯旨。謂三經論中無有四教。宛如身子梵王異見。教既四種位地亦爾。小乘藏教七賢七聖。通教十地。別教七位。円教六即。若悟此趣。曾無疑滯。八地所明灼然易通。所言八地入無功用者此通教第八地矣。何以知之。<sup>47</sup>

と、智増菩薩と悲増菩薩によって解釈することが誤ったものであり、藏通別円の四教による解釈こそが正義であると論じている。特に、龍樹や『法華論』を著した世親等は仏意を述べており、後代の人師は四教を知らないため、誤って智増菩薩や悲増菩薩によって解釈していると述べている。そして、四教によって解釈するのであれば、第八地に無功用に入るのは通教の第八地であることが示されているのである。そしてこれに対する証文として『摩訶止観』卷三下と湛然『止観輔行搜要記』に説か



れる第八地に被接がおこる文、湛然『法華文句記』卷二中の「通教の地前において位を論じることとはなく、別教の行位の名を借りて行位を会通する」という文<sup>48</sup>が引かれた後、次のように論じられる。

謹准<sup>二</sup>師宗<sup>一</sup>委引通<sup>レ</sup>之。今論八地入<sup>レ</sup>無相行<sup>一</sup>。此約<sup>二</sup>下根<sup>一</sup>。通教菩薩第八辟支仏地侵<sup>レ</sup>除習氣<sup>一</sup>。如來方說<sup>レ</sup>真諦空中<sup>一</sup>。本有<sup>二</sup>中道不空之理<sup>一</sup>。聞已入<sup>レ</sup>中也。非<sup>三</sup>是歡喜等十地之中第八不動始入<sup>二</sup>無相<sup>一</sup>。若約<sup>二</sup>通家<sup>一</sup>指<sup>レ</sup>別初地<sup>一</sup>以為<sup>二</sup>八地<sup>一</sup>。若約<sup>二</sup>別義<sup>一</sup>指<sup>レ</sup>通八地<sup>一</sup>以為<sup>二</sup>初地<sup>一</sup>。約<sup>二</sup>円教位<sup>一</sup>初発心住為<sup>二</sup>第八地<sup>一</sup>。故約<sup>二</sup>別円両教<sup>一</sup>永無<sup>二</sup>八地八住人<sup>一</sup>無功用<sup>レ</sup>者<sup>上</sup>。論師応<sup>レ</sup>知借<sup>レ</sup>別八地一名<sup>二</sup>通八地<sup>一</sup>。即是初偏後円之人。不<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>此理<sup>一</sup>何為<sup>二</sup>講說<sup>一</sup>。<sup>49</sup>

すなわち、ここでは智顛や湛然等の説に則るのであれば、第八地に無相行（無相無功用行）に入るのは、通教の下根の立場にあたる事が示される。第八地において如來から真諦のなかに空諦と中諦のあることが説かれる。なので、歡喜地からはじまる十地の第八地に無相に入るわけではないのである。また、『法華論』で説かれる第八地は、通教の立場からすれば別教の初地を指して第八地とし、別教の立場からすれば通教の第八地を指して初地とし、円教の立場からすれば初住を指して第八地にあたるとしている。また、別教や円教の立場なら、永久に別教の第八地や円教の第八住で無功用に入る者がないことが示されている。

このように、第八地において無功用に入る当時の人師の説を、四教とその行位を前提にしながら斥けている。そして、これに続く形で、

問。上引<sup>二</sup>六祖釈<sup>一</sup>曰、若言<sup>三</sup>七地始入<sup>二</sup>無功用道<sup>一</sup>此是別教教道。何故今言<sup>三</sup>別無<sup>二</sup>此義<sup>一</sup>。<sup>50</sup>

といい、なぜ湛然『法華文句記』卷二<sup>51</sup>に説かれる「第七地に無功用に入るとする別教の教道の説」を論じないのか、という問難を立てている。そして、

答。元無<sup>二</sup>此義<sup>一</sup>縱令有<sup>レ</sup>之教道權説実無<sup>二</sup>証入<sup>一</sup>。故大師曰、三教果双有<sup>レ</sup>教無<sup>レ</sup>人。亦搜要記曰、通八地被撰者、知方乃得<sup>レ</sup>曰七地論修八地論証。故六祖意一約<sup>二</sup>別教教道權説<sup>一</sup>、二約<sup>二</sup>通家七地論修<sup>一</sup>。並不<sup>レ</sup>相<sup>二</sup>違大師及經論意<sup>一</sup>。<sup>52</sup>

と答え、あくまで教道の權説であるため、実には証入することがないと主張しているのである。そして、『摩訶止観』卷三下に説かれる蔵通別三教の証果には教があるので人はいないとする三教果頭有教無人の説<sup>53</sup>と、湛然『止観輔行搜要記』卷六の通教の第七地で修し、第八地で証することによって、第八地で被接がなされる、<sup>54</sup>と説く文の引用がなされる。その上で、第七地に無功用に入るとする湛然の見解に二意あることが示される。一つは、『法華文句記』卷二中に示される「別教教道」の立場、もう一つは、『止観輔行搜要記』卷六に示される「通教の第七地で修する」あり方である。そして、これらの相違のうち、経論による文証に関する問答が次のようになされていく。すなわち、

問。師説可<sup>レ</sup>爾。經論別証如何。答。大師依<sup>二</sup>准大品大論<sup>一</sup>解<sup>レ</sup>积此義一。更不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>疑。故知、往尋耳。問。彼經論中若有<sup>二</sup>此道理<sup>一</sup>諸師合<sup>レ</sup>积。文不<sup>二</sup>分明<sup>一</sup>何以信用。答。三乘共地出<sup>レ</sup>自<sup>二</sup>大品<sup>一</sup>。通人八地別人初地円人初住。此<sup>三</sup>菩薩出<sup>レ</sup>自<sup>二</sup>积論<sup>一</sup>。今家引証義如<sup>二</sup>上説<sup>一</sup>。諸師未<sup>レ</sup>会豈有<sup>レ</sup>誰處<sup>一</sup>。靈山聽法憶在<sup>二</sup>於今<sup>一</sup>。更求<sup>二</sup>何証<sup>一</sup>。得道伝法唯我大師。事須<sup>三</sup>伏膺<sup>二</sup>斯宗義<sup>一</sup>。<sup>55</sup>

それによると、智顛は『大品般若経』と『大智度論』に依って解釈しており、三乗共十地は『大品般若経』に、通教の第八地と別教の初地および円教の初住の三教の菩薩は『大智度論』に説かれていることがあげられ、天台による引証のなされていることが示される。また、天台の説に誤りがないことが述べられ、更に被接によって『法華論』の「八地者、無功用智不<sub>レ</sub>同<sub>二</sub>下上<sub>一</sub>故。不<sub>レ</sub>同<sub>二</sub>下者、下功用行不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>動故。不<sub>レ</sub>同<sub>二</sub>上者、上無相行不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>動自然而行故<sub>一</sub>」<sup>56</sup>という文が次のように解釈される。すなわち、

今准<sub>二</sub>被撰<sub>一</sub>「更<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>論文」。不同<sub>二</sub>下者、如<sub>レ</sub>論可<sub>レ</sub>知。不同<sub>二</sub>上者、以<sub>二</sub>被撰者八地<sub>一</sub>入<sub>レ</sub>中望<sub>二</sub>旧九地<sub>一</sub>九地為<sub>レ</sub>劣。以<sub>二</sub>通家<sub>一</sub>旧人会不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>中道<sub>一</sub>故言<sub>二</sub>不同<sub>二</sub>上<sub>一</sub>耳。思<sub>レ</sub>之思<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。<sup>57</sup>

とある。特に、『法華論』の「不同<sub>二</sub>上<sub>一</sub>（上と同じでない）」とは、被接が第八地において空諦の中に中諦があること知り、別教に被接し、その上で元いた通教における第九地に望んで第九地を劣となすのである。通教の行者である旧人は中諦があることを知らないで「不同<sub>二</sub>上<sub>一</sub>（上と同じでない）」というのである、と解釈されている。そして、

問。爾論中積<sub>二</sub>九十地<sub>一</sub>超<sub>二</sub>勝八地<sub>一</sub>。今何為<sub>レ</sub>劣。答。敷<sub>二</sub>置地位<sub>一</sub>節節勝前是常途義。不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>怪。今約<sub>二</sub>被撰<sub>一</sub>借<sub>レ</sub>後通<sub>二</sub>前前劣後勝<sub>一</sub>。委在<sub>二</sub>上文<sub>一</sub>。更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>疑也。<sup>58</sup>

と、『法華論』<sup>59</sup>における第九地と第十地を解釈すると、第八地より勝れているにもかかわらず、なぜ劣とされるのか、と問がなされる。これに対して答文では、行位の一つ一つが前の位よりも勝れているのは常義

なので怪しむ必要性がないという。要するに、今ここでは、被接の立場にたつて、後の位を借りて前の位に通じさせているので前の位が劣っており後の位の方が勝れていると解釈する。四教を前提にすることで、被接の立場から解釈することが誤りでないことを示しているのである。

以上のように、『法華論記』卷一末の第八地において無功用に入ることを四教によって解釈する箇所を検討した。それによると、円珍は確かに四教による解釈を正義として用いており、第八地に無功用に入るあり方を二種菩薩の内の悲増菩薩として解釈する人師の説を斥けているのである。特に、『法華論』の文を、被接をもとにしながら解釈するというのは、ある意味で応用的といえるかも知れない。しかし、被接を特別視して解釈したというよりは、あくまで、四教が仏意に基づいていると理解をした上で、文を解釈したとみてよい。このことは、『法華論記』の別の箇所でも確認できる。<sup>60</sup> すなわち、『法華論記』卷七本において、次のように述べている。

増寿變易諸師声聞諍<sub>二</sub>今与通<sub>一</sub>之。大体如<sub>レ</sub>上<sub>二</sub>当<sub>一</sub>知。延身入<sub>レ</sub>變諸如斯言、此通教義。捨<sub>レ</sub>命入<sub>レ</sub>灰。及捨<sub>レ</sub>身入<sub>レ</sub>變。多約<sub>二</sub>三藏声聞緣覺<sub>一</sub>。得<sub>二</sub>此大達<sub>一</sub>「莫<sub>レ</sub>迷<sub>二</sub>岐路<sub>一</sub>」。又菩薩以<sub>レ</sub>誓故留<sub>二</sub>有根身<sub>一</sub>。至<sub>二</sub>第八地<sub>一</sub>方斷<sub>二</sub>隨眠<sub>一</sub>、亦約<sub>二</sub>通教下根被撰<sub>一</sub>。世人未<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>四教義<sub>一</sub>、亦悲智強<sub>レ</sub>会未<sub>レ</sub>成。若依<sub>二</sub>今家<sub>一</sub>。一切疑滯融銷如<sub>レ</sub>氷。上來番番多積<sub>二</sub>此義<sub>一</sub>。恐人迷故再三載<sub>レ</sub>之。通人知意。上預説<sub>レ</sub>文。其義未<sub>レ</sub>尽。言<sub>二</sub>預設<sub>一</sub>者、恐有<sub>二</sub>大乘起<sub>二</sub>三乘同執<sub>一</sub>耳。<sup>61</sup>

ここでは、変易生死に関する諸師の見解を通教の義と判じている。また、通教の第八地において疑惑をすることで被接するあり方と、湛然による「被接がなされる行位を三根で分類する説」を念頭に置きながら、

第八地で随眠煩惱を断じるあり方を通教下根の被接の立場から解釈する。そして、世の人が四教を知らない点と悲智（悲増と智増）によって会釈することができないことを明確に示すのである。

このように、『法華論記』における被接に関する解釈は、四教と『摩訶止観』や湛然の注釈書などに示される行位や断惑の記述を踏まえて論じられたとみてよいであろう。

#### 四 円珍『授決集』『華嚴円教兼歴別決第十二』における「接義」について

池田「一九七八A」において指摘されるように、円珍の『授決集』に「妙楽之判以別接通、他人絶無此接義」という記述がある。当該の文は「華嚴円教兼歴別決第十二」の解釈部分の「今総決曰」以降にある。「華嚴円教兼歴別決第十二」は、『華嚴経』を円教に別教を兼ねるとする天台の解釈が正当であることを論じる決である。このため、「妙楽之判以別接通、他人絶無此接義」という文は、天台による『華嚴経』解釈の正当性を論じる流れの中で示されていることが推察できるのであるが、文だけを見ると、確かに湛然（妙楽大師）の教判には別接通、つまり被接があり、他の人師には被接がないとも捉えることができる。別接通をはじめとする被接は感通別円の四教を前提としており、四教を前提としない天台以外の学派にはそもそもこの説がないため、そのような解釈もまた首肯することができるのである。

では、「妙楽之判以別接通、他人絶無此接義」の別接通や接義は、『法華玄義』や『摩訶止観』などに説かれる別接通や被接に該当するの否かという点が問題となる。そもそも、円珍の『授決集』には「別接通決第三十九」という別接通を単独で扱った決がある。「別接通決第三十九」の内容については後述するが、「別接通決第三十九」の「今決

曰」以降の箇所では湛然を評価する記述はない。また、被接に関する湛然『止観輔行伝弘決』の文は引かれるが、ことさら『止観輔行伝弘決』の文を解釈している箇所はない。そこで、当該の文がどのような意図をもって記されているのかを、「華嚴円教兼歴別決第十二」の構成を踏まえながら検討していく。

天台では『法華玄義』や『摩訶止観』などでも示されるように、『華嚴経』を円教に別教を兼ねて説くとみなしている。<sup>62</sup> 当然、立脚点が異なる他学派においては、天台とは異なる説が立てられる。円珍『授決集』「華嚴円教兼歴別決第十二」では、最初に『摩訶止観』卷五下の文<sup>63</sup>が引かれ、以降『法華経』や『無量義経』、『十地経論』、天台（智顛・灌頂）と華嚴（法蔵（六四四―七二二）・澄観（七三八―八三九））の章疏、円測（六一三―六九六）の『無量義経疏』が引かれる。<sup>64</sup> なお、引用箇所で引かれる湛然の章疏は『法華文句記』<sup>65</sup>と『法華玄義釈籤』<sup>66</sup>であるが、被接に関する記述は確認できない。

そして、「今総決曰」の箇所では『華嚴経』を兼別とする理由が次のように示される。

今総決曰、略列「龜鏡」已如「上文」。智人自鑑。更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>会<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>也。抑<sub>レ</sub>擲<sub>レ</sub>無量義及信解品文<sub>レ</sub>者、兼別之義更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>疑。非<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>貶教<sub>レ</sub>。只依<sub>レ</sub>「道理」正判<sub>レ</sub>之也。若不<sub>レ</sub>兼<sub>レ</sub>別者、珍衣長者即遣<sub>レ</sub>「傍人」。便合<sub>レ</sub>喚<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>窮子<sub>レ</sub>。何以不<sub>レ</sub>然。何隔<sub>レ</sub>「聾盲」不<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>「見聞」<sub>レ</sub>耶。我<sub>レ</sub>擲<sub>レ</sub>此文<sub>レ</sub>正為<sub>レ</sub>「兼別」。最後付<sub>レ</sub>「家業」、即是融別為<sub>レ</sub>「純円」也。<sup>67</sup>

ここでは、『摩訶止観』などで説かれる天台の説を踏襲し、『無量義経』や『法華経』信解品をもとに『華嚴経』は別教を兼ねるとしてい

る。そして、『華嚴經』を兼別するのは『華嚴經』を貶めるためにしているのではなく、道理の上からおこなっていると示す。そして、これに続いて、四教を会することがない諸師による『華嚴經』に対する理解にはいずれも兼別の義がないことを述べた上で、<sup>68</sup>

今依レ文レ積レ義。不レ可レ評レ論。凡レ為レ小レ機レ說レ初レ藏レ教レ、為レ小レ乘レ說レ通レ大レ乘レ、為レ通レ人レ說レ別レ大レ乘レ。為レ別レ乘レ說レ円レ教レ。教レ被レ次レ其レ軌レ如レ是レ。故レ華レ嚴レ教レ被レ通レ別レ機レ。接レ通レ以レ別レ。導レ別レ以レ円レ。

といい、文に依って義を評論すべきでないことが示される。藏教の行者のために通教を、通教の行者のために別教を説くといったように、教えを受ける対象は定まっており、『華嚴經』の教えであれば通教と別教の機根の行者が受けており、通教の行者を接す教は別教、別教の行者を導く教は円教であるとしている。また、

南岳位居二鉄輪六根清淨一。天台位居二第五品中一。死生自在卷舒無礙。驗二其行事一殆隣二法雲一。相似五品皆是卑謙對レ問而答也。元於二仏与レ經本無レ有二怨敵一。何以偏執褒二法華一貶二華嚴一。誠依レ實判至レ細至レ妙也。無レ總持者、或謂二謬レ積一。恐為二妄毀一。罪レ愆難免。努力努力、再三復思猶レ尚懷レ慮。乞披二經文一更闕二玄疏一。妙乘之判二以レ別接レ通一。他人絶無二此接義一。故不レ免二邪推一。<sup>70</sup>

と述べ、慧思や智顛は自らの位を鉄輪位（十信位）や五品弟子位と称したが、実には法雲地に近い位にあり、慧思や智顛等に端を発する『華嚴經』を兼別とする見解は、単に『法華經』を褒め『華嚴經』を貶めているのではないことが示される。また、經典や注釈書を確認すると、湛然

は別教によって通教を接する判定をしており、他の人師は「接」の義（接義）によって解釈することがないとしている。

これらを踏まえると、「華嚴円教兼歴別決第十二」における「以別接通」や「接通以別」という文は、『華嚴經』の教えである別教によって通教の行者を接すといった意味になるとみてよいであろう。また、湛然『法華玄義積籤』巻六に「問。此是法華滅化之文。小人正レ應得レ去。答。接義本在二法華經前一於レ中仍二是菩薩一」<sup>71</sup>と、接義があるのは、『法華經』より前の段階であるとする記述がある。このことから、『華嚴經』の教えによって被接する可能性はある。ただし、被接に関する引用や関連する記述が他に確認できないため、単純に通教の行者に別教の教えを説くといった意味かもしれない。いずれにしても、接義の有無によって解釈がなされている。

以上のように、円珍の『授決集』「華嚴円教兼歴別決第十二」を検討した結果、「以別接通」や「接通以別」といった被接、別接通に相当するような記述が確認できた。ここでは、『華嚴經』に説かれる別教の教えによって通教の行者を接す、と解釈されていた。該当箇所が仮に『摩訶止観』や『法華玄義』などで説かれる被接そのものでないにしても、被接や別接通に類する解釈がなされていたことはいえるであろう。

##### 五 円珍『授決集』「別接通決第三十九」における被接

円珍の『授決集』には「別接通決第三十九」という別接通のみを扱った決がある。先述したように円珍は既に『法華論記』において、四教を前提しながら被接による解釈を示している。そのことを踏まえながら、『授決集』「別接通決第三十九」における被接の解釈を検討してきた。

まず、『授決集』「別接通決第三十九」は、『摩訶止観』と『止観輔

行伝弘決』などの文が引かれた後、「今決曰」と引用文に対する解釈が提示される。引用文は次の通りである。

玄文有<sup>レ</sup>三。謂別円接通円接別也。止観云、問。別云何以接<sup>レ</sup>通。答。初空假<sup>二</sup>観破<sup>一</sup>真俗上惑<sup>二</sup>尽方聞<sup>一</sup>中道<sup>一</sup>。仍須<sup>レ</sup>修<sup>レ</sup>観破<sup>一</sup>無明<sup>一</sup>能八相作佛<sup>上</sup>。此仏是果。仍<sup>二</sup>前<sup>一</sup>観為<sup>レ</sup>因。故言<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>別接<sup>レ</sup>通<sup>一</sup>耳。不<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>此果<sup>一</sup>接<sup>中</sup>三阿僧祇百劫種相之因<sup>上</sup>。故不<sup>レ</sup>接<sup>三</sup>藏<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>此果<sup>一</sup>接<sup>中</sup>十地之因<sup>上</sup>。故不<sup>レ</sup>接<sup>レ</sup>別。不<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>此果<sup>一</sup>接<sup>中</sup>十住斷無明<sup>上</sup>。故不<sup>レ</sup>接<sup>レ</sup>円。唯得<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>別接<sup>レ</sup>通。其義如<sup>レ</sup>此<sup>上</sup>云。別接通開<sup>レ</sup>真出<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>。又云、諸教皆接亦<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之。此義不<sup>レ</sup>用者、二教明<sup>二</sup>界内理<sup>一</sup>、二教明<sup>一</sup>界外理<sup>一</sup>。兩処交際須<sup>レ</sup>安<sup>二</sup>接<sup>一</sup>。故但以<sup>レ</sup>別接<sup>レ</sup>通。若齊<sup>レ</sup>通為<sup>レ</sup>言。不<sup>レ</sup>論<sup>レ</sup>破<sup>一</sup>無明<sup>一</sup>。八地名<sup>二</sup>支仏地<sup>一</sup>。從此被<sup>レ</sup>接知<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>中道<sup>一</sup>。九地伏<sup>二</sup>無明<sup>一</sup>、十地破<sup>二</sup>無明<sup>一</sup>、即名為<sup>レ</sup>仏。但一品破那得<sup>二</sup>是極<sup>一</sup>。故知接<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>別<sup>一</sup>也。若望<sup>レ</sup>別教<sup>一</sup>是入<sup>レ</sup>初地位行<sup>一</sup>也。若就<sup>レ</sup>諦論<sup>レ</sup>接者、通教真諦空中合論。從<sup>レ</sup>初以來但観<sup>二</sup>真中之空<sup>一</sup>破<sup>レ</sup>見思惑<sup>一</sup>。到<sup>二</sup>第八地<sup>一</sup>方為説<sup>二</sup>真内之中<sup>一</sup>。故云<sup>二</sup>智者見空及与不空<sup>一</sup>。被<sup>レ</sup>接方聞。聞已見理。即是入<sup>レ</sup>別位<sup>一</sup>也。三藏菩薩明<sup>レ</sup>位不<sup>レ</sup>爾。故不<sup>レ</sup>論<sup>レ</sup>接。別円発心已知<sup>二</sup>中道<sup>一</sup>。更將<sup>レ</sup>何接<sup>一</sup>。故知、接但在<sup>レ</sup>通也<sup>上</sup>已在<sup>二</sup>三卷<sup>一</sup>。又云<sup>レ</sup>八六文<sup>レ</sup>、通教二乘備用<sup>二</sup>体法<sup>一</sup>入<sup>レ</sup>真。菩薩慈悲入<sup>レ</sup>仮<sup>レ</sup>乃至<sup>レ</sup>亦得<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>中道<sup>一</sup>之義<sup>上</sup>者。仏滿字門通<sup>レ</sup>通通<sup>レ</sup>別。鈍根以<sup>レ</sup>能通<sup>レ</sup>通不<sup>レ</sup>能通<sup>レ</sup>別故。此教得<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>別接之義<sup>一</sup>。利者被接更用<sup>二</sup>中道<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>被接<sup>レ</sup>者不<sup>レ</sup>須<sup>二</sup>第三観<sup>一</sup>。別接義如<sup>二</sup>顯体中説<sup>一</sup>入<sup>レ</sup>云云<sup>レ</sup>。又云、修<sup>二</sup>此双流<sup>一</sup>凡有<sup>二</sup>三処<sup>一</sup>。若別接通七地論<sup>レ</sup>修、八地論<sup>レ</sup>証。十迴向論<sup>レ</sup>修。登地論<sup>レ</sup>証入<sup>レ</sup>三十七道品止観以為<sup>二</sup>双流<sup>一</sup>。禪門章云、通教二乘不<sup>レ</sup>異<sup>二</sup>菩薩<sup>一</sup>。則真諦有<sup>二</sup>含<sup>レ</sup>中接<sup>レ</sup>別之意<sup>一</sup>。此真義含<sup>レ</sup>於中<sup>一</sup>而作<sup>二</sup>真名<sup>一</sup>。記

釈<sup>二</sup>次文<sup>一</sup>云、言<sup>二</sup>九地伏十地破<sup>一</sup>者、仍<sup>レ</sup>本立<sup>レ</sup>名名<sup>二</sup>九十地<sup>一</sup>。入<sup>二</sup>別円教<sup>一</sup>心<sup>レ</sup>云<sup>二</sup>初地及以初住<sup>一</sup>。又記六云、初明<sup>二</sup>通教以<sup>レ</sup>別接<sup>一</sup>者、方乃得<sup>レ</sup>云<sup>二</sup>七地論修八地論証<sup>一</sup>。問。第三卷明<sup>二</sup>別接通<sup>一</sup>中、何故乃云<sup>二</sup>八地聞<sup>一</sup>中道<sup>一</sup>九地伏<sup>二</sup>無明<sup>一</sup>、十地破<sup>二</sup>無明<sup>一</sup>方得<sup>中</sup>名為<sup>上</sup>仏。以<sup>二</sup>何義<sup>一</sup>故与<sup>レ</sup>此不<sup>レ</sup>同。答。始從<sup>二</sup>四地<sup>一</sup>終至<sup>二</sup>九地<sup>一</sup>咸受<sup>二</sup>接名<sup>一</sup>。三根不<sup>レ</sup>同、故位不<sup>レ</sup>等。四地為<sup>レ</sup>上、六七為<sup>レ</sup>中、八九為<sup>レ</sup>下。文從<sup>レ</sup>中説故云<sup>二</sup>七地<sup>一</sup>。前為<sup>レ</sup>消<sup>レ</sup>經故從<sup>レ</sup>下説。故大品云、十地菩薩為<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>仏。經從<sup>レ</sup>下者其位定故。故諸經論多從<sup>レ</sup>下説。<sup>73</sup>

まず、『法華玄義』に別接通だけでなく、円接通と円接別が説かれていいることがあげられる。その後、次の順で『摩訶止観』や『止観輔行伝弘決』などが引かれる。

- ① 『摩訶止観』卷三下「問云何以別接通」以下の文<sup>74</sup>
- ② 『摩訶止観』卷三下「諸教皆接亦<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之」以下の文<sup>75</sup>
- ③ 『摩訶止観』卷六下「通教二乘備用体法入真」以下の文<sup>76</sup>
- ④ 『摩訶止観』卷六下「修此双流凡有三処」以下の文<sup>77</sup>
- ⑤ 『禪門章』「通教二乘亦不異菩薩」以下の文<sup>78</sup>
- ⑥ 『止観輔行伝弘決』卷三之四「言九地伏十地破者」以下の文②の注釈<sup>79</sup>
- ⑦ 『止観輔行伝弘決』卷六之四「初明通教以別接者」以下の文④の注釈<sup>80</sup>

①から⑦に説かれることの要点をまとめると次のようになる。

①因と果よりみた別教が通教を接す構造について。

- ② 界内と界外よりみた別接通のみを論じる理由と、通教で被接がおこる行位と断惑、観察する諦の構造について。
- ③ 通教における鈍根と利根の菩薩について。
- ④ 中観を修する位と証する位について。
- ⑤ 通教の菩薩が観じる諦について。
- ⑥ ②の「九地伏十地破」に対する注釈。別教と円教に接入した場合の位について。
- ⑦ ②の「七地論修八地論証」に対する注釈。被接がおこる行位について。

これを見ると、『摩訶止観』を中心とした引用から、被接がおこる基本的な構造をうかがうことができる。そして、これらの引用に対して「今決云」以降の箇所では、『摩訶止観』の文を中心に別接通を立てることに過失がないのか否かという問難がなされるのである。

引用文①『摩訶止観』卷三下では、「此仏(是)果」と「此果」という語に対する解釈を端緒に、別接通に関する問答がなされていく。「此仏(是)果」と「此果」に対する解釈は、次のようになされる。すなわち、

今決曰、初文言「此仏果」。又再言「此果」者、此通教十地之八相作仏。指此為「此仏果及此果」也。文云、空假二観破「真俗上惑」尽方聞「中道」。仍須「修」観破「無明」。能八相作仏上。此仏是果。故言「指」通十地果「為」此果上。<sup>81</sup>

とあるように、引用文①『摩訶止観』卷三下の文にある「此仏(是)果」や「此果」という語が通教の十地における八相作仏であることが示される。次いで「文云」と引用文①『摩訶止観』卷三下の文が部分的に引かれ、通教の第十地の仏位が果にあたるので、通教の第十地を指して「此果」とすることが説かれる。この通教の第十地を指して「此果」と

する解釈に対して、さらに次のような問答が展開していく。

問。爾違「宗失」。以「三教果頭無人」故。答。彼無人者約「当教分」。非「於被接」。問。何以云「爾」。答。通教真諦空中合論。故從「初観」空破「煩惱障」。至「第八地」方説「真内之中」。所以空上更復見「聞不空」。九地伏「無明」。十地破之。即名為「仏」。故言「約」被接者。<sup>82</sup>

まず、藏・通・別の三教には果としての仏の位を証する人がいない(果頭無人)という点から、通教の第十地を指して「此果」とするのは天台の教えと相違する過失があるのではないのか、という問が立てられる。対する答文では、通教における無人は、あくまで通教の立場が該当するのであり、被接の立場は該当しないことが示される。次に、そのようなことをなぜ論じることができるのか、という問がなされるが、それに対しては引用文②『摩訶止観』卷三下の文をもとにしながら答が立てられる。それによると、通教の真諦は空諦だけでなく中諦も合わせているため、まず空諦を観じて煩惱障を断じていく。そして、第八地に至って真諦のなかに中諦があることが初めて説かれるようになる。また、第九地で無明を伏し、第十地で無明を破して仏となるのは、単なる通教の行者ではなく被接をする行者の立場からいわれているとしているのである。これに続いてさらに次の問答がなされていく。すなわち、

問。爾此接「入別」。何故可「此果為」本教仏果」。答。亦可「云」爾。但今与「果名」者、且約「八地聞」中道「辺上」。更無「他意」。<sup>83</sup>

とあるように、通教の行者が別教に接入するというのであるが、どうし

て「此果」は通教（本教）の仏果といふべきなのか、という問難が立てられている。これに対する答文では、「此果」というのは通教の果といふべきであるとしている。ただし、今ここで果の名を与えるのは、ひとまず第八地に中道を聞く立場が対象であり、他の意はないとしている。これに対してさらに次の問答がなされる。すなわち、

問。八地聞<sub>レ</sub>中。即時成<sub>二</sub>別教及円教人<sub>一</sub>。何煩更与<sub>二</sub>本教果名<sub>一</sub>。  
答。此微可<sub>レ</sub>爾。但止觀一意約<sub>レ</sub>此一人借<sub>レ</sub>指後教地住<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>果之事<sub>一</sub>。故望<sub>二</sub>八地聞中之<sub>レ</sub>辺<sub>一</sub>且与<sub>二</sub>果名<sub>一</sub>。問。爾終不<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>後教人<sub>一</sub>耶。答。被<sub>レ</sub>接方聞。聞已見<sub>レ</sub>理。即是入<sub>二</sub>別位<sub>一</sub>也。依<sub>二</sub>此意<sub>一</sub>言<sub>二</sub>別人<sub>一</sub>亦無<sub>レ</sub>妨<sup>84</sup>。

とあるように、通教の第八地において中諦の教えを聞いて別教及び円教の行者に成るのであれば、わざわざ通教の果の名を与える必要があるのであろうか、という問難がなされる。これに対する答文では、『摩訶止観』の意図は、後教である別教と円教を指して果とする立場にはかならないとし、通教の第八地に中諦の教えを聞く立場に望んで果と名づけるとしている。これに対してさらに、ではなぜ後教である別教や円教の行者といわないのかという問がなされる。これに対する答文は、引用文②『摩訶止観』卷三下の文をもとにしながら立てられている。それによると、被接によって中諦の教えを聞き、聞きおわって理をみれば別教の位に入るので、別教の人といっても差し支えないのである。この答に対してさらに次の問答が立てられる。すなわち、

問。爾約<sub>二</sub>初意<sub>一</sub>言<sub>二</sub>別接通<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>失。若就<sub>二</sub>後意<sub>一</sub>。其言有<sub>レ</sub>妨。豈不<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>別接<sub>一</sub>別耶。答。此義元從<sub>二</sub>初通後別之人<sub>一</sub>而起。故

名<sub>二</sub>別接通<sub>一</sub>。本無<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>別接<sub>レ</sub>別文<sub>一</sub>。若言<sub>レ</sub>然者不<sub>レ</sub>免<sub>二</sub>大失<sub>一</sub>（二云）<sup>85</sup>。

とあるように、別教の人といっても差し支えないというのであれば、通教の立場に立って別接通といっても過失はないが、別教の立場からは別接通ということはできない、と問難するのである。これに対する答文では、この義は初めに通教にあり、後に別教に至る行者によって起るので、別接通というのである、と答えている。そして、別教によって別教を接する文はなく、このようなことを認めることは大きな過失であると指摘されている。

以上のように、「今決云」以降の箇所では、問答を通して、別接通を説くことに過失がないことが示される。『法華論記』や『華嚴円教兼歴別決第十二』に確認できるような論は展開されていないが、四教と行位をはじめ、錯綜しそうな箇所<sub>に</sub>注意を払いながら、『摩訶止観』などに説かれる文意を正確に読み取るうとする姿勢をうかがうことができる。問答体によって論が進められているが、基本的には『摩訶止観』の説を踏まえながら解釈されているのである。独自の解釈はなされていないが、『摩訶止観』に説かれる別接通こそ正義として、論理に過失がないことを示そうとしてみても大過ないであろう。

### むすび

以上、本稿では、日本天台の良源『被接義私記』以前の被接がいかに解釈されたのかを、円珍の『法華論記』と『授決集』に焦点を当てながら考察した。

天台宗で論じられる被接は、智顛撰灌頂記の『法華玄義』と『摩訶止観』や湛然の注釈書などに確認することができる。『法華玄義』では、

四教と二諦や三諦の関係を中心に別接通・円接通・円接別の三被接が立てられていた。一方、『摩訶止観』では諦や行位、因と果、界内と界外の関係などから別接通がなされる論理が示されていた。これらを踏まえた上で湛然は、『法華玄義』に説かれる円接通・円接別はあくまで教えの上でのみ示されたものであり、『摩訶止観』で説かれる別接通こそ、所詮の理の立場から論じられたものであるとの解釈を示した。

次に、日本天台宗では最澄の頃より通教や別教から円教に至る教説に注意が払われていた。被接に関しては、義真『天台法華宗義集』の四教義と二諦義の箇所を示されている。四教義の箇所では、通教から別教と円教に至る位が示されるのみで、まとまった記述は二諦義の箇所にある。二諦義の箇所では、『法華玄義』と『法華玄義釈籤』の文をもとに、問答体で七種二諦における四教と三被接の配当、『摩訶止観』に別接通のみが説かれ、『法華玄義』に別接通だけでなく円接通・円接別が説かれる意義、蔵教に被接がない理由、『法華玄義』に五種三諦が説かれる理由等が問答体で示された。ただし、『法華玄義』と『法華玄義釈籤』からの引用が主であり、独自の解釈は示されてはいなかった。

一方、円珍の『法華論記』と『授決集』では、四教を前提に『摩訶止観』や『止観輔行伝弘決』に示される被接や別接通に基づきながら解釈している箇所が見られた。

まず、『法華論記』においては、四教に基づきながら文の解釈をおこなっていた。特に第八地に無功用に入る説を、二種菩薩のうちの悲増菩薩で解釈する人師の説を斥けている。そして、第八地に無功用に入るのは通教の第八地であると論じ、その上で行者が別接通によって別教に至ることを説いた。また、世親『法華論』の文を、被接をもとにししながら解釈する箇所もある。ただし、被接を特別視して解釈していたというよりは、あくまで四教が仏意に基づいていると理解をした上で、文を解釈

したとみてよい。

次に、『授決集』「華嚴円教兼歴別決第十二」では、「以別接通」や「接通以別」といった被接、別接通に相当するような記述が確認できた。そこでは、『華嚴経』に説かれる別教の教えによって通教の行者を被接す、と解釈することが可能である。該当箇所が『摩訶止観』や『法華玄義』などに示される被接そのものでないにしても、被接や別接通に類する解釈がなされていたということはいえるであろう。

そして、『授決集』「別接通決第三十九」では、問答を通して、別接通を説くことに過失のないことが示されていることが明らかになった。『法華論記』や『授決集』「華嚴円教兼歴別決第十二」に確認できるような論は展開されておらず、独自の解釈はなされていないが、四教と行位をはじめとする錯綜しそうな箇所に注意を払いながら、『摩訶止観』などに説かれる文意を正確に読み取るうとする姿勢をうかがうことができた。

以上の点より次のことが指摘できるであろう。円珍は蔵通別円の四教による分類を仏意に基づくと理解した上で、種々の説を解釈していた。

『法華論記』や『授決集』に見られる被接や別接通による解釈も、四教を前提に論じられているのである。そこで論じられる被接や別接通は、基本的には『摩訶止観』に示される説とそれを補足する湛然の注釈書の説を踏襲している。一方、平安末以降に作成される論義や口伝法門に関する文献に見られるような多様な説は確認できなかった。論義や口伝法門の文献に示されるあり方と趣を違にするかもしれないが、『摩訶止観』とその注釈書の説を踏襲する円珍の姿勢は、草創期の用例を示すものだと考えられる。少なくとも、日本天台においては、良源『被接義私記』が撰述された前後で被接が論じられるようになったわけではないことが明らかとなったといつてよいであろう。なお、円珍の解釈が与えた



後世への影響や円珍以後の解釈などについては、今後の課題としたい。

1 天台論義における義科二十二算の一つに被接義がある。二十二算は、『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』維摩經疏『涅槃經疏』『四教義』『観無量寿仏經疏』を所依としており、このうち『摩訶止観』からは六即義・四種三昧義・三觀義・被接義・名別義通義の五算が立てられている（藤平「二〇二〇」一八七頁―一八八頁参照）。口伝法門では、七箇大事における略伝三箇（円教三身、常寂光土義、蓮華因果）の蓮華因果に本迹不同とともに被接法門が立てられている（上杉「一九三五」六〇―頁―六〇二頁、七〇〇頁―七〇三頁参照）。

2 あくまで一例であるが、恵心流の口伝として、被接法門が往生淨土の直因とする説などが立てられている（上杉「一九三五」七〇二頁、裕「一九四八」一七六頁・二七九頁、大久保「一九九八B」二五四頁―二五五頁）参照。

3 大久保「一九九八B」参照。

4 大久保「一九九八A」によると、良源撰と考えられている『被接義私記』は、諸文献の被接を扱う箇所が良源の真撰として引用されており、特に証真『法華玄義私記』巻三で「大僧正被接義云」、「止観私記」巻三末で「大僧正云」と引用されていることから良源の真撰とするのは根拠を有することであるとされている。

また、内容面から否定する材料がただちに見いだされないことにも言及している（二七七頁―二七八頁参照）。本稿では、真偽の問題には立ち入らないが、仮に良源の真撰でないとしても、良源没後（九八五年以降）から証真の三大部私記が撰述されるよりも前の時代における教学を知ることのできる数少ない資料になるであろう。

5 大久保「一九九八A」「一九九八B」参照。

6 大久保「一九九八A」二二八頁―二三三頁参照。

7 池田「一九七八A」一〇二頁。なお、引用箇所は、安然（八四一―

九一五?）『菩提心義鈔』によって整理される蔵通別円密の五教判の先駆的な説を円珍が立てていたとする説に対して異義を立てた島地「一九二九」（三三四頁）を踏まえながら、円珍が湛然教学を前提とする教判を受容していたことを指摘していく流れの中で述べられている。

8 渡辺「一九三三」九二頁、浅井「一九七三」三九一頁、池田「一九七八B」三二二頁―三二五頁参照。

9 田島「一九三三」一〇七頁―一〇八頁、浅井「一九七三」三九一頁―三九二頁参照。なお、『授決集』は基本的に円珍の撰述と考えられているが、伝本に三種あり、一部の決や注などは後世の付加の可能性が指摘されている。伝本や決の付加などの検討は今後の課題とし、本稿ではこれ以上立ち入らない。

10 三教果頭有教無人に関しては、例えば、『摩訶止観』卷三下に「然漸漸非円漸可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>円漸<sub>一</sub>、漸円非<sub>二</sub>円円<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>円円<sub>一</sub>。何者、法華云、汝等所<sub>レ</sub>行是菩薩道。故漸漸成<sub>二</sub>円漸<sub>一</sub>、漸円權設<sub>二</sub>三教之果<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>更成<sub>二</sub>妙覺之仏<sub>一</sub>。例小小非<sub>二</sub>大小<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>大小<sub>一</sub>、小大非<sub>二</sub>大大<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>大大<sub>一</sub>。權權非<sub>二</sub>実権<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>実権<sub>一</sub>。權実非<sub>二</sub>実実<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>実実<sub>一</sub>。何者、三教果頭有<sub>レ</sub>教無<sub>レ</sub>人。故權実不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>実実<sub>一</sub>。半滿漸頓例<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>此分別。不<sub>レ</sub>復煩<sub>レ</sub>文也。」（大正四六・三三三頁下）と記されている。

11 塩入「一九六八」五〇頁―五一頁、青木「一九九二」四五頁、四九頁―五〇頁参照。

12 若杉「一九七八」参照。

13 若杉「一九七八」参照。なお、別接通・円接通・円接別は別人通・円入通・円入別と記される場合もある。「接」と「入」の違いについては張堂「二〇〇四」によって考察がなされている。また、張堂「二〇〇六」の注三（一五七頁―一五八頁）にも挙げられているように、天台教学における被接の案出を智顛とするか否かが先行研究で種々検討されている。天台教学における被接の具体的な案出者の検討などは今後の課題として、本稿ではこれ以上立ち入らない。

14 上杉「一九三五」七〇一頁―七〇二頁、若杉「一九七八」三七頁―三八頁、大久保「一九九八B」二三七頁―二三八頁、二五二頁―二五四頁など参照。

15 『法華玄義』卷二下(大正三三・七〇二頁下―七〇三頁下)。

16 『法華玄義』卷二下(大正三三・七〇四頁下―七〇五頁上)。

17 『法華玄義』卷二下(大正三三・七〇三頁下)。

18 なお、『法華玄義積籙』卷六では「問。若不接等者、既不<sub>レ</sub>接<sub>二</sub>乘<sub>一</sub>何故皆會。答。意者<sub>二</sub>義不<sub>レ</sub>同<sub>一</sub>。二乘之人於<sub>二</sub>法華前<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>被接<sub>一</sub>。法華被<sub>レ</sub>會復非<sub>二</sub>是接<sub>一</sub>。具如<sub>二</sub>止觀第三記<sub>一</sub>」(大正三三・八五六頁中―下)と、より具体的に二乗の人が『法華經』が説かれるより前の時点では被接することはないことが説かれる。なお、例外的に二乗の被接を認める場合もあることが、大久保「一九九八B」(二五五頁―二五七頁)、張堂「二〇〇二」(二二五頁―二三一頁)・「二〇〇六」(一五一頁―一五七頁)によって指摘されている。

19 他に、『摩訶止觀』卷三下「顯体」(大正四六・二九頁上)の箇所にも説かれる。なお、該当する「顯体」の文は本稿六五頁に引用した『授決集』「別接通決第三十九」(仏全二六・三七九頁上)にも引用されている。

20 大正四六・三四頁下。

21 大正四六・三四頁下―三五頁上。

22 大正四六・八三頁上。

23 大正四六・二五〇頁中―下。

24 大正四六・二五〇頁下。

25 大正四六・三五二頁下。

26 大久保「一九九八B」(二四〇頁―二四二頁、二四八頁―二五二頁)によって特に『止觀輔行伝弘決』で示される被接がなされる行位について、種々の解釈がなされたことが指摘されている。

27 大正四六・二三七頁上。

28 『四念処』卷二「復次通有三義」。一因果皆通、二因通果不通、三通別通

円。因果俱通者、如<sub>二</sub>上八通説<sub>一</sub>。近通偏真四枯拙度。因通果不通者、乃是別果来接。通因得<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>成<sub>中</sub>四栄双樹<sub>上</sub>。通別通円者、別円因果皆与<sub>レ</sub>通異。藉<sub>レ</sub>通開導得<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>別円因<sub>一</sub>。成<sub>二</sub>非枯非栄双樹之果<sub>一</sub>也。」(大正四六・五六三頁中)。

29 大久保「一九九八B」(二五一頁、二六二頁)によると、日本天台では証真『止觀私記』をはじめ多くの論義・口伝に関する文献において、乾慧地での被接が否定されていることが多いとの指摘がなされている。また、『大品般若經』や『大智度論』の燦炷の譬喩における初焰後焰に端を発する天台の乾慧地における断惑の解釈については、松本「二〇一九」(二五八頁―二六二頁)によって検討されている。

30 『法華玄義』卷二下「問。別教望<sub>レ</sub>円亦爾<sub>レ</sub>不。答。不<sub>レ</sub>例。円別証道同故」(大正三三・六九〇頁中)。

31 『摩訶止觀』卷三下「前兩觀因中有<sub>二</sub>教行証人<sub>一</sub>、果上但有<sub>二</sub>其教<sub>一</sub>無<sub>二</sub>行証人<sub>一</sub>。何以故。因中之人灰<sub>レ</sub>身入<sub>レ</sub>寂沈<sub>レ</sub>空<sub>レ</sub>滅。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>於果頭之仏<sub>一</sub>。直是方便之説。故有<sub>二</sub>其教<sub>一</sub>無<sub>二</sub>行証人<sub>一</sub>。別教因中有<sub>二</sub>教行証人<sub>一</sub>。若就<sub>レ</sub>果者但有<sub>二</sub>其教<sub>一</sub>無<sub>二</sub>行証人<sub>一</sub>。何以故。若破<sub>二</sub>無明<sub>一</sub>登<sub>二</sub>初地<sub>一</sub>時、即是円家初住位、非<sub>二</sub>復別家初地位<sub>一</sub>也。初地尚爾、何況後地後果。故知因人不<sub>レ</sub>到<sub>二</sub>於果<sub>一</sub>。故云<sub>二</sub>果頭無<sub>レ</sub>人<sub>一</sub>」(大正四六・三三三頁上―中)。

32 伝全五・四三頁。

33 前注三一。

34 伝全五・四三頁―四四頁。

35 円接通の可能性もあるが、確認した限り湛然『止觀輔行伝弘決』などには円接通に関する行位の記述は無かった。湛然以後に立てられた可能性もある。若しくは、『止觀輔行伝弘決』卷三之三(注二七)のように、方便として通教を示し、実際には円教の行者とみなしている可能性もある。なお、円教における行位と断惑の記述は、例えば『法華玄義』卷五上の円教の位における断伏が説かれる箇

所で「十信之位伏道転強、発得似解、破界内見思界内界外無知塵沙」；若入「初住」得「真法音陀羅尼」。正破「無明」始名「断道」。(大正三三・七三五頁下—七三六頁上)と示されるように、十信では塵沙惑が初住から無明惑が断じられる。

36『法華玄義積籟』卷二の次の文を元にして考えると考えられる。「次不知之人中云補処数世界不知者、如寿命量中五百億那由他阿僧祇三千大千世界尽抹為塵。復過爾所世界乃下一塵。塵数已多况下塵不下塵界。寧当可数。下塵不下塵界尚不可知。况界中塵。寧当可数。况如塵数以一塵為一劫。仏成道來復過是数億阿僧祇。未發迹來、弥勒不知。雖發迹竟、補処智力不知界数。况知塵耶。所以開迹顯本皆入初住。故云作仏。本門發迹於果不疑。故皆發願求此実果。故云、願我於未來説壽亦如是」(大正三三・八二六頁中)。

37大正七四・二六六頁下。

38前注三一。

39大正七四・二七五頁上。

40順番は前後するが、次の『法華玄義』卷二下と『法華玄義積籟』卷六の文をもとにしている。

『法華玄義』卷二下「問。何不接三藏」。答。三藏是界内不相即。小乘取証根取之士故不接。余六是摩訶衍門。若欲前進亦可得去。是故被接。問。若不接亦不會。答。接義非會義。未會之前不接被接」(大正三三・七〇三頁下)。

『法華玄義積籟』卷六「故仏於一代曲開七重二十一重。以赴物情使仏本懷暢、使物宿種遂故。三正釈中。先列、次釈。初意者、一藏、二通、三別接通、四円接通、五別、六円接別、七円。若止観中為成理観但以界外理一以接界内理。故藏通兩教明別円二教明界外理。通別兩教是明二両理之交際。是故但明別接通耳。今前六重仍存教道。於法華前返彼

權機故有円接通別二義。実道祇応円来接權。故釈今文「応順」教道復以円中「接」於但中。又此七名雖立三諦後之五意義已含三。幻有即俗、空即是真、不空是中。但観名「中空」合在「何諦」。若合在「俗諦」即如別教名「含真入俗二諦」。若合入「真諦」如別円入通名「含中入真」諦。藏通即名「単俗単真」。円教即名「不思議真俗」。細得「此意」尋「名釈」義不失「毫微」(大正三三・八五四頁上—中)。

41なお、真偽は不明だが円仁(七九四—八六四)の撰と伝えられる『法華迹門観心絶待妙釈』と『法華本門観心十妙釈』に被接に関する記述が確認できる。『法華迹門観心絶待妙釈』では「通相三観惣接。昔時帶權所生円別接通、円接通、円接別三観。就三接人未得念不退時、猶帶本教習。故云解心通亦名惣相三観」(仏全二四・六六上)と通相三観を三被接によって示している。『法華本門観心十妙釈』では「又玄義釈通仏齊縁寿者、今私会云、不名共教一名通教者、欲広兼取当通云通別通円義。故当通丈六如蔵仏寿。尊特身中兼被接機見他受用身円常三身。故望蔵仏一与奪明義。且約常辺。故云齊縁」。如積籟二云。以通教遠能通常理故。且対蔵以為無常。但玄義七引「像法決疑経」、云一劫減一劫矣。此別接通円接通機修行時節隨「根不定」。故且爾也」(仏全二四・七九頁上)と、通教の仏は縁が尽きれば入滅するが、あくまで通教の仏であり、被接する行者はその限りでないことが示されている。

42なお、『法華論記』に依用されている『法華論』については、勒那摩提訳の可能性が指摘されている。特に、前川「一九九五」(一〇〇頁)に、敦煌本の勒那摩提訳(S二五〇四)によく一致しているとの指摘がある。また、金「二〇一〇」(三五三頁—三五三頁)に、『法華論記』に引用される『法華論』は、入蔵以前の勒那摩提訳の古形である可能性の指摘がなされている。本稿では便宜上、『大正新脩大蔵経』に収録されている勒那摩提訳の『法華論』を用いる。

43古蔵や基の解釈に対する批判は、池田「一九七八A」(九八頁—九九頁)・「一九七八B」(三二六頁)や前川「二〇〇二」・「二〇〇四」・「二〇〇五」など

で指摘されている。

44 仏全三・三九頁上一下。

45 前川「二九九五」（九二頁—九二頁）によると引用を示さない場合もあるが、「慈恩」や「基」「他」「或」「有（人）」「人」「先覚」として基『法華玄贊』が多く引かれていることが指摘されている。少なくとも、二種菩薩を立てているのは、基もしくは基の系統に属する人師等であるとみてよい。ただし、「已上人語」の割注が円珍によって挿入されたのかは検討の余地がある。

46 智増菩薩と悲増菩薩は基『成唯識論述記』巻七本「論、有<sub>下</sub>從<sub>中</sub>初地<sub>一</sub>至<sub>中</sub>滅尽定<sub>上</sub>故。述曰、復有<sub>下</sub>頓悟決定性人<sub>一</sub>。有<sub>下</sub>從<sub>中</sub>初地<sub>一</sub>即能伏<sub>中</sub>一切煩惱<sub>上</sub>；即十地菩薩。有<sub>レ</sub>起<sub>二</sub>煩惱<sub>一</sub>、謂悲増上者。有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>起<sub>二</sub>煩惱<sub>一</sub>、謂智増上者」（大正四三・四八三頁上）などで説かれている。深浦「一九五四」五一—四頁、六六—五頁、七〇—八頁参照。

47 仏全三・三九頁下。

48 『法華論記』巻一末（仏全三・三九頁下—四〇頁上）。『法華論記』に引かれる『法華文句記』巻二中の文は「通教地前無<sub>二</sub>位可<sub>レ</sub>論<sub>一</sub>。借<sub>二</sub>別位名<sub>一</sub>以通其位<sub>一</sub>」（大正三四・一八三頁上）である。なお、『摩訶止観』と『止観輔行搜要記』の出拠の頁数は次の通りである。『摩訶止観』巻三下（大正四六・二九頁上、三四頁下—三五頁上）と『止観輔行搜要記』巻三（新纂統感五五・七七頁上、七八三頁下）・巻六（新纂統感五五・八三三頁下—八二四頁上）。

49 仏全三・四〇頁上一下。

50 仏全三・四〇頁下。

51 『法華文句記』巻二中「若言<sub>二</sub>七地始入<sub>二</sub>無功用道<sub>一</sub>、此是別教教道明<sub>レ</sub>義」（大正三四・一八三頁下）。

52 仏全三・四〇頁下。

53 前掲注一〇。

54 『止観輔行搜要記』巻六「若別接下、明<sub>二</sub>通八地被接者知<sub>一</sub>、方乃得<sub>レ</sub>云<sub>二</sub>七地

論<sub>レ</sub>修八地論<sub>レ</sub>証。若<sub>二</sub>第三卷<sub>一</sub>從<sub>二</sub>下根<sub>一</sub>說。故八地間<sub>レ</sub>中、九地伏<sub>二</sub>無明<sub>一</sub>、十地破<sub>二</sub>無明<sub>一</sub>。此中中根上根亦可<sub>二</sub>四五地接<sub>一</sub>。教多從<sub>レ</sub>下、其位定故」（新纂統感五五・八三三頁下—八二四頁上）。

55 仏全三・四〇頁下—四一頁上。

56 大正二六・二二頁上。

57 仏全三・四一頁上。

58 仏全三・四一頁上。

59 勒那摩提記『法華論』「於<sub>二</sub>九地中<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>勝進陀羅尼門<sub>一</sub>具<sub>二</sub>足四無礙自在<sub>一</sub>故。於<sub>二</sub>第十地中<sub>一</sub>、不退転法輪得<sub>二</sub>仏受<sub>レ</sub>位、如<sub>二</sub>転輪王子<sub>一</sub>故」（大正二六・二二頁上）。

60 『法華論記』巻七本の他、被接に関する記述は、引用箇所を除くと『法華論記』巻一本（仏全三・八頁上）・巻二（仏全三・四三頁上）・巻三本（仏全三・七七八頁下）などにも確認できる。

61 仏全三・二〇七頁下。

62 『法華玄義』巻一上「結者、当<sub>レ</sub>知。華嚴兼、三藏但、方等对、般若带。此經無<sub>二</sub>復兼但对带<sub>一</sub>。専是正直無上之道。故称为<sub>二</sub>妙法<sub>一</sub>也」（大正三三・六八二頁中）や『摩訶止観』巻五下「華嚴亦有<sub>二</sub>三意<sub>一</sub>。宣<sub>二</sub>說菩薩歷劫修行<sub>一</sub>、彼為<sub>二</sub>鈍根<sub>一</sub>也。初發心時使成<sub>二</sub>正覚<sub>一</sub>、所有慧身不<sub>二</sub>由<sub>レ</sub>他悟<sub>一</sub>、彼是利根也。法華唯一意。正直捨<sub>二</sub>方便<sub>一</sub>但說<sub>二</sub>無上道<sub>一</sub>」（大正四六・六二頁上）などで示されるように、天台では、華嚴は別教を兼ねるとしている。

63 仏全二六・三四九頁上。文の出拠は『摩訶止観』巻五下（大正四六・六二頁上）。

64 『授決集』「華嚴円教兼歴別決第十二」の「総決」に至るまで引用される文献は赤尾「一九八九」（七七六頁—七七七頁）に列挙されている。また、『授決集』「華嚴円教兼歴別決第十二」における引用部分と「今総決曰」の冒頭箇所までの流れは、赤尾「一九八九」（七七八頁—七八三頁）によって考察されている。

- 65 仏全二六・三五〇頁中一下。出拠は『法華文句記』卷四下（大正三四・二二一頁中一下）である。
- 66 仏全二六・三五〇頁下―三五二頁上。出拠は『法華玄義積籤』卷二十（大正三三・九五九頁下）である。
- 67 仏全二六・三五三頁下。
- 68 『授決集』「若不<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>之須<sub>レ</sub>破<sub>レ</sub>仏<sub>レ</sub>經」。再三諦聽。華嚴只收<sub>レ</sub>大根之利鈍<sub>レ</sub>、不<sub>レ</sub>收<sub>レ</sub>小根之利鈍<sub>レ</sub>。所以在<sub>レ</sub>座隔<sub>レ</sub>之無<sub>レ</sub>分。何更拒執。爾絕不<sub>レ</sub>會<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>別助<sub>レ</sub>円之理<sub>レ</sub>。實是鈍淺之智耳。世人不<sub>レ</sub>會<sub>レ</sub>四教<sub>レ</sub>暗<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>兩教<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>三教菩薩<sub>レ</sub>。只混淆為<sub>レ</sub>三乘<sub>レ</sub>。乘<sub>レ</sub>斯弊<sub>レ</sub>迷<sub>レ</sub>權實<sub>レ</sub>。設唱<sub>レ</sub>迂直<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>弁<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>三階及以後一義<sub>レ</sub>。大底職<sub>レ</sub>之甚闇<sub>レ</sub>黑白<sub>レ</sub>…彼後分者、即第九會入法界品。正說<sub>レ</sub>菩薩歷劫修行<sub>レ</sub>。此無量義經所<sub>レ</sub>指海空也。非<sub>レ</sub>唯天台独施<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>。他疏亦明<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>之。今宗疏解的會<sub>レ</sub>兩經<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>義經。妙經<sub>レ</sub>。性論之法界、此別時義也。未顯真美之唱、何以不<sub>レ</sub>籠<sub>レ</sub>寂場始說<sub>レ</sub>耶。般若之後說<sub>レ</sub>華嚴經<sub>レ</sub>齊<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>法華<sub>レ</sub>。又其時節長非<sub>レ</sub>唯我<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>之。嘉祥數家相伝在<sub>レ</sub>今。而不<sub>レ</sub>會<sub>レ</sub>豐咄文<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>兼別之義<sub>レ</sub>。迷中之迷世莫<sub>レ</sub>類乎。無文之記早合<sub>レ</sub>停<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>（仏全二六・三五三頁下―三五四頁上）。
- 69 仏全二六・三五四頁上。
- 70 仏全二六・三五四頁上一下。
- 71 大正三三・八五六頁下。
- 72 大久保「一九九八B」（二五七頁―二五八頁）によると、被接の義があるのは『法華經』以前であり、これが根本説になっているという指摘がある。更に、『法華經』の後に説かれる『涅槃經』における被接の有無に関して議論がなされており、例えば、証真『法華玄義私記』（仏全二一・一〇二頁上）では『涅槃經』による被接を肯定する論が展開されていたことが言及されている。
- 73 仏全二六・三七九頁上―三八〇頁上。
- 74 大正四六・二九頁上。
- 75 大正四六・三四頁下―三五頁上。
- 76 大正四六・八〇頁下。
- 77 大正四六・八三頁上。
- 78 新纂続蔵五五・六五一頁下。
- 79 大正四六・二五〇頁下。
- 80 大正四六・三五二頁下。
- 81 仏全二六・三八〇頁上。
- 82 仏全二六・三八〇頁上。
- 83 仏全二六・三八〇頁上一下。
- 84 仏全二六・三八〇頁下。
- 85 仏全二六・三八〇頁下。

## 参考文献一覧

- 青木隆「一九九二」『天台行位説の形成に関する考察―地論宗説と比較して―』『日本・中国仏教思想とその展開』、三七頁―五四頁、山喜房佛書林。
- 赤尾栄慶「一九八九」『授決集』の一考察―「華嚴円教兼歴別決」について―『智證大師研究』七七五頁―七八七頁。
- 浅井円道「一九七三」『上古日本天台本門思想史』平楽寺書店。
- 池田魯参「一九七八A」「円珍『法華論記』における天台研究の特質」『駒沢大学仏教学部論集』九、九二頁―一〇七頁。
- 池田魯参「一九七八B」「円珍の『法華論』について」『印度学仏教学研究』二七（一）、三二頁―三二六頁。
- 上杉文秀「一九三五」『日本天台史』破塵閣書房。
- 大久保良峻「一九九八A」「良源撰『被接義私記』について」『天台教学と本覚思想』、二二七頁―二三五頁、法蔵館、（初出…『天台学报』三六、一九九四年）。
- 大久保良峻「一九九八B」「日本天台における被接義の展開―基礎的事項を中心

- に―』『天台教学と本覚思想』、二二六頁―二六四頁、法藏館、(初出…大久保良順先生傘寿記念論文集『仏教文化の展開』、山喜房佛書林、一九九四年)。
- 金炳坤「二〇二〇」『流支訳『法華論』の流布本について―序品を中心として』『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』(法華経研究叢書Ⅱ)、三五六頁―二四二頁、身延山大学国際日蓮学研究所。
- 塩入良道「一九六八」『天台行位説形成に関する諸問題―藏教と通教について―』『大正大学研究紀要』五四、二五頁―五二頁。
- 島地大等「一九二九」『天台教学史』明治書院。
- 田島德音「一九六四」『授決集』『佛書解説大辞典』第五卷(改訂版)、一〇七頁―一〇八頁、(初版…一九三三年)。
- 張堂興志「二〇〇二」『被接における二、三の問題―藏教の扱いをめぐる―』『天台学報』四五、一二五頁―一三一頁。
- 張堂興志「二〇〇四」『被接に関する一考察―「入」と「接」に注目して―』『山家学会紀要』六・七、八四頁―九四頁。
- 張堂興志「二〇〇六」『被接説と章安灌頂』『天台学報』四八、一五〇頁―一六〇頁。
- 裕慈弘「一九四八」『日本仏教の開展とその基調』下巻、三省堂。
- 深浦正文「一九五四」『唯識学研究』、永田文昌堂。
- 藤平寛田「二〇二〇」『天台論義の基礎と文献』『日本仏教と論義』(龍谷大学アジア仏教文化研究叢書一三) 一七五頁―一九七頁、法藏館。
- 前川健一「一九九五」『円珍』『法華論記』の引用文献―未詳文献の解明を中心に―』『インド哲学仏教学研究』三、八九頁―一〇三頁。
- 前川健一「二〇〇二」『円珍』『法華論記』の法華思想―「釈序品」に於ける『法華玄贊』批判を中心に―』『東洋哲学研究所紀要』一八、三頁―二二頁。
- 前川健一「二〇〇四」『円珍』『法華論記』の法華思想(二)―「釈方便品」に於ける『法華玄贊』批判(一)―』『東洋哲学研究所紀要』二〇、八三頁―九六頁。
- 前川健一「二〇〇五」『円珍』『法華論記』の法華思想(三)―「釈方便品」に於ける『法華玄贊』批判(二)―』『東洋哲学研究所紀要』二一、四一頁―五二頁。
- 松本知己「二〇一九」『乾慧断惑と二入通―証真説を中心に―』『院政期天台教学の研究―宝地房証真の思想―』二五五頁―二七六頁、法藏館、(初出…大久保良峻教授還暦記念論集『天台・真言諸宗論攷』、山喜房佛書林、二〇一五年)。
- 若杉見龍「一九七八年」『「被接」について』『棲神』五〇、二八頁―四二頁。
- 渡辺最昌「一九六四」『法華論記』『佛書解説大辞典』第十卷(改訂版)、九二頁―九三頁、(初版…一九三三年)。